小学生の身体と生活時間の関係に表れる性差について　その①

－生産的生活時間に着目して－

○小林浩平・村上智恵・原祐一(東京学芸大学大学院)

キーワード：生産的生活時間　身体　性差

１、目的

現代の子どもの体力を捉える上で、一般的に指標として掲げられてきているのは文部科学省によるスポーツテスト・新体力テストであり、これについては長年にわたり妥当性や安全性について議論が交わされている。1999年度より実施された新体力テストにおいても同様のことがいえ、単純にこの結果から体力と性差の関係についてみていくと、「女性は体力がない」といった、ジェンダーバイアスのかかった言説が生まれる。飯田(1995)は文部科学省のスポーツテスト・新体力テストから前にあげた言説を問い直す試みをしており、「このテストの結果から性差による評価を行うことは、結果的に性別間の差を強調することとなる」としている。このことからも、子どもの身体を捉える際に、体力テストの結果のみから性差について検討することには様々な問題点があろう。

そこで、子どもの身体を捉えていくには、生活時間との関係や、生活の中から見られる動きの特徴との関係を見る必要があるのではないか。田中(2001)は、小学校の新体力テスト成績は児童の日常的な運動の頻度や時間を反映するとともに、学校での遊びの活動性を反映することを明らかにしている。しかし、この研究において述べられている「運動の頻度や時間」は学校内の活動や生活におけるものであり、学校外での活動や生活を含めて比較されたものではない。

松田(2001)は、スポーツを子どもの文化として考える視点から、「スポーツに対する興味・関心は、子どもの遊びや生活、学校教育全般の問題ともかなりの程度かぶっている。」と指摘していることからも、生活全般と身体との関係を明らかにする必要があるのではないか。

これらのことから本研究の目的は、小学生の身体と生活時間の関係から表れる性差を明らかにすることである。そこで、本報告では、特に生活時間の中でも生産的生活時間(勉強、塾、習い事、手伝い、宿題、読書)に焦点をあてることにする。

２、研究方法

１）対象者

T小学校全学年の児童４０６名　期間：2006年10月下旬～11月上旬

２）調査内容

・生活時間調査：１日２４時間を子どもがどのように過ごしたかを調査用紙に記す。１５分単位で該当項目に直線を書き入れる様式であり、学校生活のある一日を対象とした。調査用紙は、総務省の行っている「社会生活基本調査」の調査票を基に、項目数の選別や子ども用の項目を加えるなどの検討をして作成したものである。

・動き調べ：８３項目の動きを表した絵に、最近一週間の間で行った動きに丸をつける。８３項目の絵は、８つの運動群にまとめられている。

・体力テスト：50m走、立ち幅跳び、ソフトボール投げ

３、結果と考察

体力テストの結果から、立ち幅跳び、ソフトボール投げにおいて高学年で男子のほうが女子より有意な差があった。また、動き調べの８３項目を８つの動作郡(姿勢変化・平衡動作、上下動作、水平動作、回避動作、荷重動作、脱荷重動作、補足動作、攻撃動作)に分けて、男女差を見たところ、多くの動作で高学年において、男子の方が女子に比べて上回っていた。しかし、「脱荷重動作」ではおいては、男子に比べて女子が上回っていた。この結果から男女に見られる動きの差を読みとることができる。これらの結果をもとに、生産的生活時間との関係性についての結果は、当日詳しく発表する。

４、参考文献

・飯田貴子・井谷恵子(2004)　スポーツ・ジェンダー学への招待.

・飯田貴子(2004)　体力観の形成とジェンダーに関する調査研究.スポーツとジェンダー研究 2.pp31～42.

・松田恵示 (2006)「第３の時間」と子どもの運動遊び・スポーツ--日本とタイの生活時間調査の比較から (小特集 スポーツと開発教育). 開発教育.53.pp158～168.